

信仰の父アブラハムと信仰義認

今日からローマの信徒への手紙の第4章の学びに入る。パウロはこれまで①神の前には義人はいない、ひとりもない；ユダヤ人であろうが異邦人であろうが、すべての人はその罪のゆえに神の栄光をうけられない状態にあること、②人が神の前に義とされるのは、いかなる意味でも人間の価値や善行努力や功績によるのではなく、ただキリストイエスの贖いによるのであり、③その価なしの神の恵みをただ信仰をもって受け入れることによって人は義とされること、④従って、人間には誇るべきものは何もない、ということをお話してきた。

そして第4章に入って使徒パウロは、この福音の教えが彼自身や他の使徒たちによる新奇な主張ではなく、神が旧約の昔から父祖たちに約束された約束（契約）の成就以外のなにものでもないことを、ユダヤ人が「信仰の父」と仰ぐアブラハムの事例を引き合いに出して論証する。

アブラハムが神の前に義とされたのは、彼が律法の要求を完全に満たして功績を得たからではない（律法がイスラエルに与えられたのは430年後のモーセの時代である）。それは彼が神の約束を信じたこと、すなわち「わたしはあなたの子孫によって全世界を祝福しよう」という神の約束を、彼自身人間的に見れば子を生まむことなど全く不可能と思えるような状態にありながら信じて従ったという、その信仰によるものであった（4：19、創世記15：6）。そして、その信仰によって受けた義のしるしとして割礼を身に受けたのである（創世記17：10）。

アブラハムに与えられた約束、彼が信じて義とされた、その約束とは何であったか。それは彼から出る「ひとりの子孫」によって全世界を祝福するという人類救済の約束であった。アブラハムから出てくるその「子孫」とはだれか。それこそは「イエス・キリスト」にほかならないと使徒パウロは主張する（ガラテヤ3：16）。

イエス・キリストご自身、彼を信じることを拒んだユダヤ人に「あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでた。そしてそれを見て喜んだ」と言われた（ヨハネ8：56）。神はご自身のしもべアブラハムに約束されたように、キリストをこの世に送られ、彼によって全世界を祝福する道を開かれたのである。

イエス・キリストによる罪の贖いと、それに基づく全世界の祝福は、父祖アブラハムに与えられた神の恩寵の約束の成就であり、歴史における実現であったのである。アブラハムはやがて来るべきこの日、すなわち、キリストの到来を、はるか前方に見つつ期待して生きた。神の約束をひたすら信じて生きた。その信仰によって彼は義とされたのである。

新約の時代に生きる私たちもまた、すでにお出でになられたこのキリストとその贖いの恵みを、アブラハムのように、ただ信じ受け入れることによって神の前に義とされ救われるのである。これは神学的には「信仰義認」と呼ばれる。罪ある者が聖なる神の前に義とされること、すなわち、人の救いはただ「信仰による」のであって、いかなる意味でも人間の努力や価値や功績によるものではないということ、したがって、それはただ神の恩寵である、というのがイエス・キリストの福音の中心的メッセージである。